

遙かなる風雪

実録・柴田音吉洋服店

18

伸びる服地卸部——国産毛織物の台頭

2代目音吉が情熱を傾けかけた服地卸部門は順調に伸びた舶来銘柄の雄としていま世界マーケットに君臨するロンドンのマーチャント・ドームフレヤー社との輸入契約は彼の最大のヒットであり、柴田の名がラシャ業界に不動の位置を築く基礎ともなった。

音吉がドーム社との直輸入契約を結んだのは大正4年、ラシャ業界に一步を踏み出したころだった。

ロンドンの事情にくわしく語学力と国際人としての生活態度を身につけ、優れた洞察力をもつこの若い日本人を信用し、マーケット拡大を任せたドーム社にも先見の明があったというべきだろう。

彼はこのドーム以外にも英国のマーチャント、ミルからの直輸入を着々と進めた。

ロンドン在住のJ・クレリーを媒介者として彼に2〜3%の手数料を払い、見本の取つぎ、製品の発注に当らせた。大正9年の恐慌の際、危ぶまれた経営を、これら直輸入製品の公開オークションで切抜けたのも彼の手腕だった。

昭和に入ると国産毛織物が急速な発展を遂げ、ラシャ部門の経営は安定した。

洋服部の裏手に建てられた同じ3階建の事務所は活気を帯び、従業員も増えた。昭和初期、神戸本店の洋服部、ラ



ドームフレヤー社クロス極東支配人とともに庭に立つ二代目音吉

シャ部合わせて110人前の食事がまかない方で作られていたと当時の社員の記憶にある

× ×

昭和5〜6年ごろから本格的に扱い出した国産毛織物は品質も良く、價格的に手頃だったことから急速に需要が増していった。

柴田の店が当初2シーズン扱ったのは伊丹製絨の製品だった。その後尾州メーカーの台頭めざましく、長谷川毛織橋本毛織、少し遅れて御幸毛織、大垣毛織（後東亜紡に合併）などの毛織物が扱われるようになった。大同毛織、渡彦毛織、近藤毛織の製品もあった。（日本毛織は当時から竹馬系列での独占取扱い）

これら国産毛織物は洋服地

のシェアを大きくぬり替えた。舶来駆逐を果そうとする尾州毛織物産業の勢いはすさまじく、産地では血と汗の品質向上への努力が続いた。

ラシャ商から洋服店への卸値が1ヤード6円50銭から8円程度という国産服地

は、10円以上もする舶来服地をそうして追い抜いていった柴田の洋服部でも昭和12〜13年ごろには国産、舶来の取扱いが半々になっている。

ラシャ部では注文生産にもこのころ手を染めた。三井物産と共同で仕入れたタスマニア産ウールを沼津毛織で織らせ、ドスキンやメルトンなどの服地を作った。

17円50銭というその値段は“舶来より高い”と評判を呼んだが、それだけの品質もっていたと現白井相談役は述懐する。

× ×

一方輸入契約を結んだドームフレヤー社は着々と世界に地歩を固めていった。

1842年パリで設立された会社で、1852年にロンドンに進出。現在同社の中枢となっているワーウィック・ストリートに1926年社屋を設置した。

1921年（大正10年）ドームが発表したスポーテックスは毛織物業界に一時代を画した。いま、毛織物にはほとんど耳マークが入っているが、世界ではじめて耳マークを織りこんだのがこのスポーテックスだった。この名は一世を風び、やがて同種類製品の一般名称とさえなっていた。

柴田音吉商店はこれを売りに売った。（つづく）

岡 和子記者